

『世界寺子屋運動の大切さ』

富岡市立額部小学校 6年 北村 紗奈

あなたは、しっかりと勉強していますか。これを聞いた人、ほとんどが「はい」と答えるでしょう。ですが、世界にはちゃんとした教育を受けられていない人がたくさんいます。

私は何も知りませんでした。この作文を書くことになり調べるまで。その調べた中で、私が興味を持ったのは「世界寺子屋運動」です。私が最初言ったように、世界の人々が学べるように支援をする活動です。私は調べてまず思ったのは、しょうげきです。訳があつて学校に行けない六才から十四才の子どもは約一億二一〇〇万人もいます。そして、教育ができないまま大人になり読み書きができない人は約七億七三〇〇万人いることが調べて分かりました。学校に行けない理由はさまざまです。貧困や紛争、学校が遠い、家事の手伝いなどがあります。これが今の世界です。行きたくても行けない人がたくさんいることを知りました。

ユネスコは「すべての人が公平に学べる場をつくる」というのを目標に、活動をしています。主に、カンボジア、アフガニスタン、ネパール、ミャンマーなどです。

私は感動しました。素晴らしい活動だと思いました。私はなにも知らないのに SDGs のことを調べて、ただ理解するだけ。ユネスコの作文を書くことになり分かったのは、まず現状を知ることです。今私達が知らない場所では戦争が起こってい

るかもしれません。たくさんの人が死んでいるかもしれません。ただテレビでやっていることを見るだけでなく、自主的に調べないと分からないこともあります。世界の人「今」を知れば、少し平和になるのかもしれませんが。戦争をなくそうとかすぐにできることじゃなくても、自分ができることをちょっとずつ続けていくことで今生きている人が少しでも安心してらせるようになれば幸せです。

自分がこれから意識したいことは、人生を楽しく生きることです。若いうちに死んでしまう人がいます。今生きられているのはとても幸せなことで、大切に生きなきゃなと改めて思いました。家に住んでいることも、トイレが使えていること、三食ごはんが食べられていることも私にとっては当たり前です。ですが、その当たり前は世界と同じでしょうか。その当たり前を守るためにがんばって生きようと思います。今しかできないことを最大限に楽しんで後悔しないようにしたいです。

『未来を創る教育』

富岡市立妙義中学校 3年 嶋田 優菜

私は、とある女の子の動画に心を打たれた。その動画に映っていたのは、カンボジアに住む十六歳の女の子、サムナンさんだった。サムナンさんは、家が貧しく、兄や姉の進学にお金が必要だったため、学校を辞めたと話していた。十六歳というと私と年が近いため、より感情移入して見てしまった。学校を辞めた後は両親を支えるために、掃除や洗濯、牛の世話など毎日家の手伝いをしていたそう。家の貧しさや環境から学校を辞めてしまう人の話はテレビ等でよく聞くが、改めて動画でその様な人達のことを見ると、気の毒でならなかった。動画をそのまま見続けていると、「寺子屋」という言葉がでてきた。彼女はそこで二年間学び、中学校、高校へと進学することができたそう。

気になったので寺子屋について調べてみると、ユネスコが行っている「世界寺子屋運動」にたどり着いた。世界寺子屋運動とは、全ての人が公平に学ぶ機会を得られるよう、無償で学ぶ機会を応援する活動である。実際、世界には読み書きができない人が約七億五千万人もいるそう。日本は法律で定められている義務教育のおかげで文字の読み書きを学習することができるため、識字率は百パーセントだそう。文字の読み書きができるのは当たり前だと思っていたが、それは大きな間違いだと知った。そして、文字の読み書き、計算ができない人々に教育の場を与えているのが世界寺子屋運動であると分かった。

文字の読み書きや計算ができないと様々な問題が起こり得る。例えば文字が読めなければ危険を認識することができない。薬品の誤飲や警告看板を理解できず、危険な場所に足を踏み入れてしまうかもしれない。また、計算ができないと詐欺行為にあってしまう可能性だってある。就職することもままならなくなってしまうのだ。

私たちに何かできることはないのだろうかと考えた結果、書き損じハガキの回収活動を行っていたことを思い出した。私たちの学校では毎年冬に書き損じハガキ、未使用の切手やプリペイドカードなどのタンス遺産を回収する活動をしている。私は、印刷ミスをした年賀ハガキを冬休み明けに学校に持っていつている。本当にこれで寺子屋が建つのだろうか毎回疑ってしまうが、ユネスコのホームページを見てみると成果が現れていた。書き損じハガキも十四枚集まれば、カンボジアでは一人が一ヵ月学校に通うことができるそうだ。教育が受けられない人の学びを支えているんだと思うと、何だか嬉しくなった。

教育を受けられるのが当たり前ではないと改めて実感した今、世界の教育問題と強く向き合い、自分にできることをしたいと強く思った。

『ユネスコと世界遺産』

富岡市立富岡小学校 6年 茂木 光

ぼくは、ユネスコと世界遺産について思ったことがあります。

まず、ユネスコ（UNESCO）とは、国民の教育、科学、文化の交流を通じて、国際平和と人類の福祉を目的とした、国際的な組織です。世界中の歴史的な建物や、後世に残していくべきの文化や自然などを審査し、世界遺産に登録しています。世界遺産は、より観光客を増やしたり、厳重に守ったりするためだけにあるのではないのです。他に、どんな役に立っているのか、思ったことが二つあります。

まず、一つ目に思ったことは、教育に深く関係していることです。なぜなら、世界遺産になることで、ただのお寺が有名になり、多くの人が、「なんで世界遺産になったの？」や「どんな歴史がある建物なの？」などと、深く知りたくなるからです。

二つ目に思ったことは、地域にも、とても関係することです。なぜなら、ぼくが住んでいる富岡市にも、富岡製糸場という世界遺産があります。富岡製糸場があることで、富岡製糸場が富岡市のほこりになります。またそのことで、富岡市にはすごい魅力があると、少しだけでも自信をもつことができます。自信をもつことで、地域を大切にしようともなります。だから、地域の人々の関わりや、SDGsにも、とてもいい

と思いました。

このように、世界遺産は、観光客を増やすだけでなく、教育や地域、SDGsなどにも、とても関係していると思います。また、自分の身近にも世界遺産があるので、より、地域の人々との関わりを強くしたり、地域を大切にしたりしていきたいです。

『あたりまえ？』

富岡市立西小学校 6年 今井 蒼介

「ユネスコ」と聞くとぼくは、世界遺産を守る活動をしていることが思いうかびます。それと、学校で書きそんじはがきを集めていることが思いうかびました。この作文を書くにあたり、どんな活動をしているのかなと思い、ユネスコのホームページで調べてみました。調べてみるとぼくが知らない活動がたくさんありました。災害子ども教育支援や未来遺産運動などです。

そこで特に印象に残ったのが、世界寺子屋運動という活動です。名前もどういう活動をしているのかも全く知りませんでした。世界寺子屋運動についてくわしく調べてみると、教育を受けられない子どもと教育を受けられなかった大人たちが教育を受けられるように学べる場をつくるという活動でした。日本では義務教育があるため文字などをあたりまえに書けます。日本に生まれたぼくは、「字が書ける」のはふつうだと思っていました。ですが世界では字を書くことすらできない人がいることがわかりおどろきました。

次にぼくは今、どれくらい教育を受けられない子どもがいるかを調べました。結果、約六千百万人もいることがわかりました。この人数は、今の日本の子どもの数の約四倍です。同じ地球の上でも国の紛争などの理由によって学校に行けない。まんぞくに教育を受けられない人たちがこん

なにもたくさんいるのだとおどろきました。

最後にぼくは、なぜ教育を受けなければなのかを調べました。調べてみると、就職ができないことや自己表現ができないことなどがあり、みんなが平等に暮らせるようにユネスコは世界寺子屋運動をしているのだと思いました。

今ぼくたちがあたりまえのように教育を受けられるのはすごくありがたいことなんだと改めて感じました。日本ではあたりまえのことが、あたりまえにできない人たちがいることを忘れてはいけないと思いました。これからは勉強ができることに感謝し、ぼくが知らない世界で起こっているたくさんの中にも知っていきたいと思いました。

『ぼくの町の世界遺産』

富岡市立丹生小学校 6年 須藤 千智

ぼくの町には、富岡製糸場という世界遺産があります。平成二十六年、ぼくが三才のときに登録されました。なので、自分としては気付いたら当たり前にあった物で、学校などでも何度か訪れたこともあり、すごく身近に感じている場所です。でも、今回この作文を書くにあたって改めて調べてみると、世界遺産とは「世界に人々で守って後世の人たちに伝えていく貴重な文化財」だということを知り、自分の住んでいる町に世界遺産があるということは、思っていた以上にすごいことなのだと思います。

富岡製糸場は、ぼくが生まれるはるか前、明治時代に作られました。上毛カルタで「日本で最初の」とよまれています、アジアでも初の近代的な工場でもあったそうです。生糸を生産し、日本の近代化を支えていたことを2学期の歴史の授業で習いました。つまりカイコがいなかったら、今の日本はないということです。なぜかという、開国当時、日本は世界からかなり遅れをとっていました。その日本が富岡製糸場で生糸を大量生産し、それを世界に売り外貨を稼ぐことで、国が強く豊かになれたからです。

ただ、ぼくの母が子供の頃は、母の祖父母の家、近所の家など、たくさんの農家でカイコを飼っていたそうですが、今は養蚕農家はとても減っています。ぼくも実際にカイコを飼ってい

る農家を見たことがなく、富岡製糸場ももう動いていません。それは少し残念だけれど、総合的な学習の授業で、今、カイコと絹が衣服関係以外の様々な分野で注目されていることを知りました。中でもぼくが一番、興味関心をもったのは、NASAなどが、カイコを食料として研究していることです。カイコはたんぱく質が豊富で栄養価も高く、おまけに水と桑の葉があれば、簡単にしかも1ヶ月程度で大きくなります。今後心配される地球上での食糧危機だけでなく、あまり資源がない宇宙でも食料として大いに期待されています。ただ、ぼくはカイコを食べるのは少し抵抗があるので、今から食べることに慣れておく必要があるなと思いました。またカイコの糸はたんぱく質なため人間の体と相性が良く、人工血管も開発されているそうです。アレルギー反応が起こりにくく、今後、医療の世界でも活躍が期待されています。カイコはかつて日本の近代化を支えてくれましたが、これからは日本だけでなく、世界の未来を支える、本当にすごい生き物だなと思います。

ぼくは偶然、世界遺産・富岡製糸場のある町に生まれ、そのおかげで、カイコや富岡製糸場の素晴らしさを学ぶことができ、とても幸せに思います。また同時に、この素晴らしい「絹の文化」を、ぼくが生まれる前からずっと今に伝えてくれた先人達に感謝の気持ちで一杯です。この素晴らしい「絹の文化」をたくさんの人に知ってもらい、未来へとつなげていくのが、これからのぼくたちの役割であり、そのためにも、これからもずっと富岡製糸場と絹の文化を大切にしていきたいです。

『明るい未来を創るために』

富岡市立富岡中学校 2年 田中 孝一

僕は、テレビのニュースなどでよく「ユネスコ」という言葉を耳にすることがあります。学校でも夏休みの作文の選択課題で「ユネスコについて」という選択肢を見たことがあります。その言葉には興味を持っていますが、「ユネスコって何？」と聞かれても何も言えません。そこで、ユネスコについて調べてみようと思いました。

まず、ユネスコは国際連合の組織で、名前には教育・科学・文化という意味が含まれています。そして、教育の普及、科学の発展、文化遺産の保護や活用を目的に様々な活動を行っています。

僕はこの結果から、科学について重視していることが少し意外だと感じました。ユネスコは僕たちの知らない世界の課題についてまで考えているんだと思いました。

そして、僕が印象に残ったことが二つあります。

一つ目は、ユネスコの加盟国の数です。現在の世界の国は百九十六ヶ国あり、そのうち百九十五ヶ国がユネスコに加盟しているということです。調べていく中でアメリカが脱退してしまったということも知りましたが、その一ヶ国以外の全ての国が加盟していることに僕はとても驚き、ほとんどの国が協力していることが本当にすごいと思いました。

二つ目は、世界遺産の保護についてです。世界には開発途

上国という資金や人材、技術などが不足している国もあり、そのような国の危機的な状況にある世界遺産の保護にもユネスコは力を入れています。主に行っていることは、保全活動や人材育成・普及啓発活動などです。僕は世界遺産の保護に、保全活動などの修復作業のイメージを持っていたのですが、人材育成や普及啓発活動という取り組みを知って他の取り組みもあると分かりました。普及啓発活動とは、行っていることを市民などに伝えることです。僕は時々、コンビニエンスストアに行ったときレジで募金箱を見ることがあります。普及啓発活動について調べたとき、僕は身近な所にまで活動が進んでいるんだと感じました。人材育成についても調べました。これは、修復技術を教え、未来に伝えていくための意識や行動を育むことだそうです。この取り組みをすることで、危機的な状況にある世界遺産が減り、開発途上国を減らすことができます。

僕はユネスコについて調べ、この組織は世界の国同士が協力してより良い未来を創るためにとても重要だと僕は思いました。もし自分たちに活動する力がなくても、募金活動など、小さなできることを続けていくことで少しでも力になれると僕は考えます。僕は、これから世界の一人一人が協力し、明るい未来が完成することを願っています。

『夢や希望を守るため』

富岡市立富岡中学校 1年 須賀 翔音

僕は、東日本大震災の時、一歳でした。今回調べるまでは、今の僕と同じ世代の子どもの学校生活や進学の手、将来の夢が途絶えてしまっていたことを知りませんでした。

ユネスコの活動について調べた時に、東日本大震災の時に進学をためらう子どもが多くいたことを知りました。そんな子どものためにと、全国から日本ユネスコ協会連盟に集まった寄付で、五千人を超える子どもたちの学びを支援することができたことを知り、もっとたくさんの人に活動を知って欲しいと思いました。

自然災害は、日本のどこにでもいつか起こる可能性があります。巨大地震とそれに伴う大津波は、今後三十年以内に七十パーセントから八十パーセントの高い確率で発生が予測されており、台風や豪雨、土砂災害は毎年のように多発し、多くの学校や家庭や学校が被災し子どもの教育環境が危機に陥っています。東日本大震災では、多くの被害が出ました。就学のための経済的支援が必要になった子どもは約三万七千人、被災した学校の数約六千二百八十四校、全壊、流出した住居は約十二万棟。そして、災害で仕事や家を失ってしまった親を助けるため就職して高校に行けなかった、行かなかった子どももいました。そんな人たちの学びを守るため、ユネスコは「災害子ども教育支援」という活動を始めました。

一つ目は奨学金です。災害で就学のための経済的な支援が必要になった生徒や災害で親を亡くした生徒に、一人あたり月額二万円の給付型奨学金を三年間にわたって支援してくれます。

二つ目は学校支援です。災害で被害を受けた幼稚園、小学校、中学校、高等学校など、教育・子どもに関連する機関・施設に一校あたり、二十万円から百万円相当の範囲内で必要な物資等を調達するための支援を行います。災害時には、学校ごとに必要なものが異なります。東日本大震災での学校支援の経験を生かし、被災地の要望を一校一校聞いて、支援のミスマッチや支援のタイミングのズレが生じないように支援していきます。

三つ目はユース、ボランティア支援です。復旧、復興のためのボランティア活動に取り組む次代を担うユース・グループが力仕事など、若者の力が必要な災害後まもない復旧、復興の場面でボランティア活動に取りくむ意欲のあるユース・グループに対して、被災地への旅費の一部を支援します。

最後に、ユネスコではいつか起こる未来の災害に備えて子どもたちの未来を守るため、未来を担っていく若者のため、これから起こる災害で子どもたちの学びが途切れないように被災地の教育復興を支えています。多くの人にこの活動を知ってもらい、支援の輪を広げ将来の夢や希望を守ってほしい、守りたいと思いました。

『世界中のみんなに教育を』

富岡市立妙義中学校 3年 永井 杏

私が「ユネスコ」と聞いたときに思い浮かんだ活動は書きそんじハガキの収集です。なぜなら、ほとんど毎年、この活動に参加しているからです。この活動を知ったのは小学生のときです。小学校で書きそんじハガキの収集について説明されたときに「ハガキが十四枚あると一人がひと月学校に通える」と言っていました。その説明を聞いたときにこの活動に協力したいとすぐに思いました。だから、家に帰ってから、ハガキを探しました。しかし、家で集めたハガキは十四枚もありませんでした。でも、これで誰かの役に立てると思うととてもうれしい気持ちになったことを覚えています。私はこのような経験があったので世界の教育について調べてみました。

まず、ユネスコとは、教育・科学・文化における国際協力を通じて世界の平和と人類の福祉に貢献している国際機関のことです。さらに、ユネスコが行っている教育に関しての活動を調べてみると、世界寺子屋運動とありました。世界寺子屋運動は一九八九年から活動を始め、基本的人権として誰もが教育の機会を得て、貧困のサイクルを断ち切り自ら行動を起こすことを目標として活動しています。世界には学校に行けない人がたくさんいますが、それ以上に教育を受けないまま大人になって、文字の読み書きができない人がたくさんいることを知りました。日本人の大人で文字の読み書きができない人はあまりいないと思います。だから、大人が文字の読み書きができないのはとても深刻な問題だと思います。しかし、教育が受けられない国はテレビ

や本がなく、文字に触れる機会が少ないと思います。また、文字の読み書きができない大人が増えると、大人が子供に文字の読み書きが教えられず、もっと文字の読み書きができない人が増えてしまいます。そのような人を減らすために、寺子屋で多くの人が教育を受けられるようになってほしいです。

日本にいと、教育を受けられることが当たり前ではないことを感じづらと思います。でも、世界に目を向けると教育を受けられないことが当たり前な地域があります。私は学ぶことはとても楽しいし、新しいことを学ぶときはワクワクします。そんな体験を世界中の人にしてほしいと思います。だから、私はこれからも書きそんじハガキの収集に協力して、世界寺子屋運動を広められるようにしたいと思います。また、世界の教育についての現状を多くの人が知り、みんなが支援をしていく世の中になってほしいです。